



「ゲッセマネの園」に残るフェニックス。賀川は対面する峰を「ペテロ山」「パウロ山」と名付け、信仰を深めたという

キリスト教社会運動家

賀川豊彦(香川県豊島)

瀬戸内海の十字路に位置する香川県土庄町豊島。日本が抜き差しならぬ戦争への道を歩もうとしていた70年前、自由な言論活動を封じられた賀川豊彦は、この島で事実上の軟禁生活を送った。

起居した館の裏山の灌木を抜け、稜線を20分余り登った丘陵地を「ゲッセマネの園」と名付けた。聖書を読み、祈りをささげるのを日課としていたという。

ふもとの神子ヶ浜の沖をフェリ

先人の風景

▼ 45

題字は
高木聖鶴筆

ーが進む。賀川が去った後、島に不法投棄された60万トを超える産廃をコンテナに密封し、溶融処理施設のある隣の直島へと運ぶ。やぶに包まれたかつての庭園にフェニックスが根付いていた。賀川が復活と再生を祈った島は、試練をくぐり、不死鳥となってよみがえることができるだろうか。

文・池本正人
写真・長瀬正己

5面に続く

先人の風景

題字は 高木聖筆

1943年11月に投函された賀川のはがきが残っている。職業紹介事業で賀川の右腕になった武内勝(瀬戸内市長船町生まれ、66年没)にあてたものだ。

飛び回るイナゴたちをかき分けるようにして刈り取り機が進む。瀬戸内海を望む豊島の棚田でハンドルを握るのは、早稲田大大学院助教の切川卓也さん(27)。島住民会議の先頭に立ち、不法投棄廃棄と闘い続けてきた安岐正三さん(68)も作田に収穫の秋が訪れた。紫黒色の古代もち米をほらむ。

切川さんは豊島事件の公啓文を毎日手伝って居ります。書調停成立に尽力した永田勝也早稲田大教授の研究室に稲を置く。安岐さんたちと産廃撤去後の島の再生を話し合い、たどり着いた「神愛保養農園」を開拓。その後、南部の神子ヶ浜に移転し、敬愛する英国人司祭にちなんで「ウェスレー館」と名付けたサナトリウム兼教会で、本土から渡っ

農園開拓著述にふける



「唐種の清水」がわく豊島は賀川が滞在したころも先人がはぐくんだ棚田が広がっていた。今、産廃撤去運動に立ち上がった住民と大学研究者が協力し、豊かな恵みを後世に受け継ぐ「早稲田米」の収穫に取り組んでいる。

平和、復活祈った「夢の島」



た結核患者とともに療養し、著述にふけた。20年に出版した自伝的小説「死線を越えて」は400万部に達した大正期最大のベストセラー。講演旅行した米国や欧州で何十万人もの聴衆の心を揺さぶり、ガンジー、シュバイツァーと同列の「聖者」とたたえられた人物が瀬戸内の離島にやってきたのである。

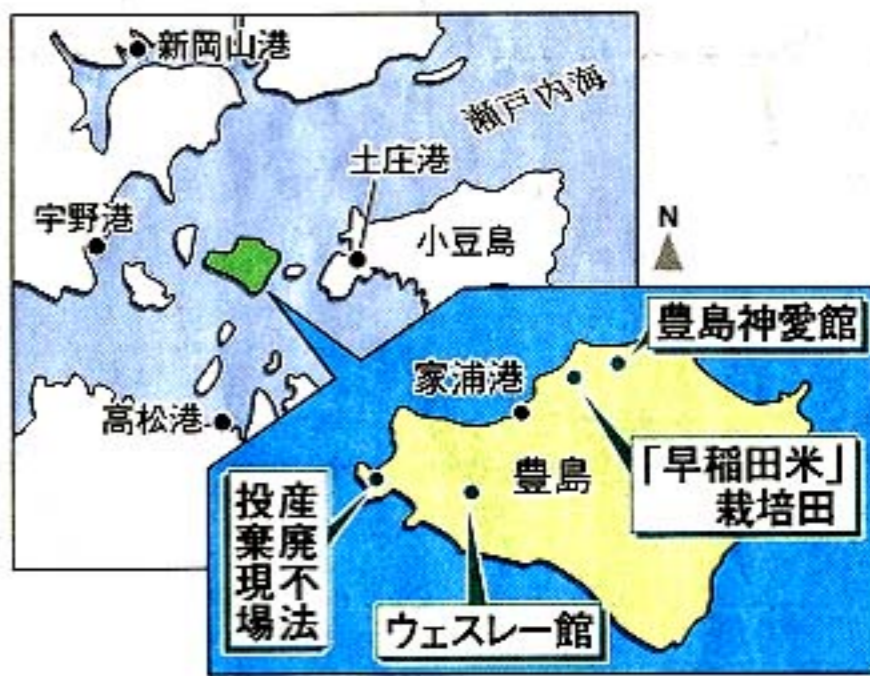
朽ちようとするウェスレー館の隣で、今も稲作に取り組み砂川三男さん(81)は、小学生のころ、賀川にたびたび頭をなでてもらった。地学などの博識に驚かされ、「賀川先生が島に『文化』を持ち込んだことは間違いない」と証言する。

41年12月初旬、賀川は最後の一秒まで日米開戦回避を信じ、両国のキリスト教徒へ徹夜の平和祈とう会を呼びかけた。しかし、同8日に太平洋戦争が勃発。豊島での「稲こぎ」の日々は、祈りが届かなかった失意のどん底にあったはずだ。

ところが、「死すら後に立つのだ!」「『死』を代償として支拂は無ければ、復活は無いのだ!」「豊島にて」と添え書きした42年の著書「復活の福音」の序文はどこまでも力強い。「単なる戦争反対論ではない。間違ったという自覚を持ち再出発する。絶望せず、へこたれなかった」。戦後は戦意高揚に協力した

と批判にさらされた完全な私学。「とにかく頑固一徹で研究一筋だった」。島の資料を調べている牧師息子(61)が暮らす向校跡地では、賀川と藤崎が追究した「立体農業」に基づき、栽培奨励したベカン(クルミ科)の木が今も実をつける。

賀川の召天とともに始まった高度成長、大量生産・消費社会は、立体農業を飲み込み、全国最大級の不法投棄産廃というツケを「夢の島」に押しつけた。ウェスレー館へ通じるうっそうとしたやぶ道の前には、公害調査台を記念し、藤崎盛一も島へ渡り、47年、住民会議議長を務めていた砂川さんたちが植えたオリーブが育つ。再び「百年に一度」の経済危機に陥る現在、世界は賀川が豊島で予言した「復活の日」を待ち望んでいる。



福祉の島

賀川が開拓した「神愛保養農園」の跡地には、1947年、彼の勤めを受けた吉村静枝(96年没)が坂出から8人の孤児たちとともに来島し、乳児院「豊島神愛館」を開設した。賀川が創立した社会福祉・学校法人「イエス団」(本部・神戸市)が運営を引き継ぎ、廃園した以前、豊島は「福祉」にあふれる島、特別養育院を転用した「島」と呼ばれていた。賀川の小説「乳児院」に描かれた「ナオミ荘」(ナオミ、設「みくに成人寮」と蜜の流るゝ郷」は旧約聖書に登場するも立地し、産廃事件(今月、家の光協会)がわく、と下(1)18888



賀川が開拓した保養農園跡地に立つ豊島神愛館。高齢・過疎化が進む島の中でもここは子どもたちの楽園であり続けている

から復刻出版)は福島の寒村が舞台だが、協同組合と立体農業の理想にまい進する自身や藤崎盛一(76年刊)の「(76年刊)と(76年刊)の前後をたどることが出来る。藤崎の著書「農民教育五十年」(76年刊)によると、立体農業は米麦、野菜、果樹栽培、畜産、酪農を組み合わせて、

校に学び、1909年12月、世界各国に招かれ、協同組合を1900年、神戸で開演かい、戸のストラムに住み込み、救済、基礎とした理想社会の建設を説き、この目的に生まれる父母が、労働組合プロモの先頭に立ち、早世一家が破産、結核にむしは、関東大震災の救援ボランティアで活躍。神戸購買組合(コ)1ヘル平和賞候補に挙げられてト教に入信。明治学院、神戸神学1ブ(ろ)への前身)を設立し、いたことも確認されている。